

第8章 夫婦

夫は

夫は神経が細かい人なのか、のん気な人なのかわかりません。蜘蛛の研究を趣味にしています。そのデータを見ると、きちんとした性格である事がうかがえます。字も丁寧です。しかし、難問が来ても、「なるようにしかならない。明日は明日の風が吹く」と言って大イビキをかいて寝てしまいます。

私は、細かい事を気にして、いつまでも、くよくよするタイプです。気持ちをすぐ切り換えて前に進んで行ける夫が不思議です。この夫がいてくれるので、私は愚痴をこぼしながら生きています。夫は我慢強い人で、私の救いです。つまり、夫は私の「タン壺」のようなものです。この人が現在まで私の夫をやってくれています。

夫が何かにつけて話題にする歌があります。『NHKみんなのうた』で放送されて覚えたとす。 「歌ってよ」と言うと、すぐ音程を外しながら歌ってくれます。のん気なものです。

とっくりやしの木

作詞 近江靖子 作曲 山本直純

- 一、とっくりやしは 空見てる とっくりやしは 空見てる
ぼんやり ぼんやり 空見てる ひとりぼっちで さみしかないの
ひとりぼっちで さみしかないの とっくりやしの木 大きなやしの木
ぼんやり ぼんやり 空見てる
- 二、とっくりやしは 風の中 とっくりやしは 風の中
ひっそり ひっそり 風の中 風にふかれて さびしかないの

風にふかれて さびしかないのとっくりやしの木 大きなやしの木

ひっそり ひっそり 風の中

三、とっくりやしは 夢見てる とっくりやしは 夢見てる

ゆらら ゆらら 夢見てる 夢を見ながら さびしかないの

夢を見ながら さびしかないの とっくりやしの木 大きなやしの木

ゆらら ゆらら ゆらゆら夢見てる

『NHKみんなのうた』昭和四十一年(1966年)十月 十一月の歌(立川澄人・歌手)

夫の生き方

「僕は他人に自分を正しく理解してもらおうとは思っていません。誤解をされても、別にいいじゃないか。誤解は、その人なり理解なのだから、それはそれでいいのです。人間関係は誤解しあうことで成り立っているんですよ。いちいち気にして訂正しようとすることは不可能で、それは無駄というものです。無駄なことに力をつくすことはしません。大学生の時に、この生き方を悟った」と夫が言いました。

平成二十二年(2010年)暮れ、「人がなんちゅおーが、かまわんぜよ。自由に生きるのが、いいがや」と坂本竜馬に言わせて、人気のNHK大河ドラマ『竜馬伝』は終わりました。しかし、脚本家は最後に、「自由で、わがままで、いつも女に好かれちゅう、竜馬。おまんの生き方が、わしは大嫌いじゃ」と三菱の創始者・岩崎弥太郎に言わせています。竜馬の生き方は、幼な馴染みの弥太郎に大きな影響を及ぼしました。弥太郎の生き方も竜馬の生き方そのものでした。人は、自分と同じ生き方の人を嫌うものです。しかし、総集編では、これら大胆な創作部分は省かれていました。省かれた理由は、時間の関係だけではないかもしれません。「ちょっと脚本家の遊びすぎ」と、視

聴者からクレームが付いたのかもしれませんが。

私には、「他人に何を言われようとかまわない」という生き方はどうにも理解できません。

私は

私は童謡の会を主宰しています。会員は、「今日は、歌っているうちに楽しくて踊りたくなった」とか、「話を聞いていたら、おかしくてイスから転げ落ちそうだった。」さらに、「笑いすぎて腹がよじれた」などと口々に言いつつ帰宅します。いったい、どの話がそれほど笑えたのでしょうか。「この会は、歌を歌う会ですよ。みなさん歌も歌ってくださいね」と言うと、また大笑いになります。

中には、わざわざ「次回、このような話をされたらいかがですか。面白いですよ」などと話のネタをくださる方もあります。私は、ここの部分で笑いを取ろうと計画して話しているわけではありませんが、笑って歌って楽しくやって、すでに二十年以上になります。もちろん、自分も楽しんで童謡の会をしている事に感謝しています。

童謡の会員からのメッセージ

「いつも楽しい時間をありがとうございます。外に出る機会の少ない私ですが、童謡の会に出席して、好きな歌が歌えて、人様と触れ合えるのは嬉しいです。ずうっと童謡の会が続いているように願っています。」

童謡の会は、このような童謡を歌う事の好きなたくさんの会員に支えられています。みなさん私に好意的です。ありがたい事です。

退院

私は、平成二十二年(2010年)十月二十二日から二十九日まで突発性難聴で秦野赤十

字病院に八日間入院して退院した。この病気は国内で年三万五千人に発症するとされ、原因はわかっていない。

入院すると、長女が「流行歌手のようだね」「ホテルのような病院だね」と言って見舞ってくれた。次女は「ベートーベンのようだね。作曲でもしたら」「行ってあげようか」と言って見舞ってくれた。夫は「片方だけで再発はない」「行った方がいいかな」と言って見舞ってくれた。

入院中、家族が来てくれた事は嬉しい事で、安心がありました。入院は最初から決められた八日間でした。

日赤の五病棟は整形外科、外科、耳鼻咽喉科の病棟です。整形外科の人は車いすで、足や手にギブスをしていて痛々しい。外科の患者のほとんどは癌で、あちらからも、こちらからも吐く声が出ていました。癌を宣告された患者は頑張って生きていました。その頑張りには言葉にできません。

四人部屋に一人で居る私に、次々とみんなが話しかけて来ました。

「私は胃癌なの。お腹の中央からメスをいれたのよ。明日退院なの。」

「七年前に癌をやって、癒着で入院したの。入歯を作っている途中だから、歯がないの。あっちもこっちもで、もうボロボロなの。」

「九年前に左のオッパイを切除したのだけれど、今度は右に転移していて、右も切ったの。あなたなんか、神経が細かそうだから、癌と言われたら生きて行けないわね。」

「自転車が転倒して腰を打って大腿骨骨折で車椅子になったの。あなたも、自転車に乗るの、やめた方がいいわよ。」

整形外科のナースステーションの中では、大声でわめいている車椅子に乗ったおばあさんがいました。みんなに迷惑をかけていました。

どうやら私が患者の中で一番軽い人のようでした。私は、一日一本の点滴と薬を飲み、三度の食事、テレビは見ないで寝たり起きたりの生活をしました。起床を知らせる看護婦さんが「よく寝ていましたよ」と言うほど、私は死んだようにぐっすり眠りました。真新しい病棟は船のような設計で、それはまるで「豪華八日間船の旅」のようでした。

八日後に退院しました。生命保険から入院給付金が出ることがわかりました。手術をしていないので、医者書類は必要がなく簡単でした。「必要事項をもう一度、お願いします」と言うと、第一生命の電話の対応の女の子は大声で怒鳴ったので笑いました。私が最初に「突発性難聴になり入院した」と言ったからです。きっと、まだ聞こえていないと思ったのでしょう。

退院の知らせを聞いて、親しくしている大工さんがフルーツバスケットを持って見舞いに来てくれました。昔の病氣見舞いの定番の品でした。それを目にした時、大病をした感じがしました。八日間の入院が、どれほど大変なことだったか改めて感じた。

退院してみると、平凡な日常が輝いて見える。秋の紅葉の風景が美しい。何もかもが新鮮です。青い空、白い雲、小鳥のさえずり、野菊が咲いて風に揺れています。夫が「それを末期の眼というんだよ」と言いました。その聞きなれない言葉は、私を本当の病人のような気分にさせました。

帰宅すると、野良猫のろくちゃんが出迎えてくれた。「ろくちゃん、お耳が聞こえなくなっちゃったんだよ」。ろくちゃんは何も言わず、洗濯物を干す私を眺めていた。「この八日間、エサを何もやっていない」と夫が言った。

退院をしても、入院していた時と聞こえ方にはほとんど変化がなく、薬を飲み続け、不安な日々が続いた。自分の声が必要以上に響き、トイレや風呂場のような狭い空間

では、耳がふさがれた感覚です。左耳だけなので、日常生活ではさほど不便はありませんが、私は音楽をする人です。歌を指導する人です。このままでは困ります。

この病気は「即入院し、七日間、一般的な治療であるステロイドの点滴治療を受けても、完治する人は三割程度、五割で改善が見られるが、二割には効果がないといわれる」。

十一月二十九日、退院から一カ月後に聴力検査をした。左右同じグラフとなり、左の聴力が戻っていた。また歌が歌える。これほど嬉しい事はありません。私は、大勢の人と一緒に童謡や唱歌を歌うのが大好きです。

私は、旅行はもう行きたくないと思っています。日赤で「豪華八日間船の旅」のような体験をしたばかりだからです。

あきれた夫婦

あきれた「買いしめ」

東日本大震災(平成二十三年三月十一日)があった翌日、夜中の十一時頃、夫が「冷蔵庫に何も無いから、買い物に行こう」と言うので、夫婦で駅前の二十四時間開店しているマーケットに行った。すると、ほとんどの食料品や雑貨が店頭から消えていた。夫が「被災地に送ったのでしょうか」と言うので、私も「そうねえ」と納得し、その日は、明日食べる物(普段買わない瓶詰や缶詰)を買って帰宅した。

翌日のテレビニュースを見て、みんなが買い占めに走ったのだと知り、驚いた。夫婦で「そうだったのか」と納得した。知人が、「昨日はみんなが買い占めをして、すごかったわねえ」と言っていた。夫は「買い占めたものは、困っている人に分けてあげるんだよ」と言った。私は「なるほど」と思った。

一週間もしない内に、マーケットは普通の状態に戻った。家の中には空瓶と空缶が残った。

大地震にともない福島原発で事故が起きて、電力不足となり計画停電が実施された。パソコンで仕事をしている私は肝を冷やした。時間ぎりぎりまで仕事をし、停電が過ぎるのを今か今かと待った。夜間の停電では「充電式フットライト」が役に立った。

東京に住む娘に電話をすると、「計画停電がない」と言った。それを聞いた夫が「その地域には国の重要な施設があるのでしょうか」と言った。テレビドラマ『Xファイル』のような、秘密基地があると想像した私は「そうなのか」と納得した。後日わかった事だが、東京二十三区は、最初から計画停電からはずされていた。それだけの事だった。

その時の仕事は順調に進み、横浜銀行の冊子「マイウェイ」は予定通り完成し配布された。

あきれた「三味線」

テレビニュースで『津軽じょんがら節』を歌った女性歌手が亡くなったニュースが流れた。一瞬だったので、詳細は不明。「『津軽じょんがら節』ってどんな歌かしら」と言うと、夫が「津軽三味線さ」と言って、三味線を持ち鳴らす真似をした。「ジャンジャンジャン」

「それは、津軽三味線でしょう。 帰って来いよー、ジャンジャンジャンジャン、帰って来いよー、ジャンジャンジャンジャンという歌よ」

「全然違うね。それは昔流行った若い女性演歌歌手の歌だよ。ジャンジャンジャンジャン」「お父さん、うるさいわ。ジャンジャンジャンジャン」

ひとしきり台所はジャンジャンという「くち三味線」の大合唱となった。

あきれた「熊さん」

夫の車で隣町のマーケットに買い物に行った。「一緒にマーケットの中に行くなら、この買い物袋を持ってくれる」「いいよ」

車の外に出ると、続いて夫が私の後ろからついて来た。振り返って言った。「熊さんのようだよ」「すると、あなたが(「森のクマさん」の)おじょうさんですか」「笑わせないで。時間ももったいないから、すぐに買い物をすませましょう」かんろくのついた熊さんは、「ある日 森の中 熊さんに 出会った・・・」と歌いながらついて来た。

夫は、マーケットの中では、私が押すカートの前になり後になり、商品を手に取って見たり、ブラブラついて来た。周囲を見渡すと、同じような男の人が何人もいる。なんとなく気の毒な感じがした。レジが終わり、「さっき渡した買い物袋は？」と聞くと、「これですか」とショッピングバックを見せた。「あれ、二個渡したでしょ」「一個だけだったよ」「そうだっけ」それで、そのバックに買った物を入れマーケットを出た。「あれ？これって、ウチのじゃない？」マーケットの入口に落ちていたのは、私が夫に持たせたはずの、もう一個の買い物袋だった。一時間近くマーケットの中にいた間、大勢の人が通ったはずなのに、だれも拾わなかったのかと驚いた。そして、私から受け取ったバックの事を全然気にしていない夫にあきれた。バックを二個持って出たか、一個だったか忘れた自分に落ち込んだ。

夫婦の会話

「食べる時」の会話

「今日は小田原に行ったのでシューマイ弁当を買って来たわ。おいしそうよ」と言う

と、「弁当を食べるのなら、お茶だね。お茶、お茶」と夫が言った。「今沸かし始めたからまだよ」。そして夫は「シュウマイ弁当は、弁当の中で一番値段が安い。学校の行事の時には決まって出る。お茶はまだか。お茶、お茶」と平気で言った。

塩素を飛ばすために鉄瓶で沸騰させている。湯は一瞬で湧く。魔法瓶は使用していない。

「お茶をどうぞ」と百円ショップで買った大きなマグカップを差し出す。お茶を出す時は、「どうぞ」と必ず言うようにしている。クセのように「どうぞ」と言葉が出るのは、入れたお茶の味にこだわっているからだ。「味は、いかがかしら」という意味もある。すると夫は「あなたも座って食べなさい。ほら、お茶が遅いから食べ終わってしまったよ」と平気で言った。一口食べた私が「シュウマイ弁当、おいしい。なかなかの物だね。醤油入れのシュウチャンが付いていないわ。昔はいろいろな顔をしたシュウチャンがいたのよ」と言うと、夫は「お茶、おかわり。もう一杯お茶を下さい。今日のお茶は、おいしい」そして、「お茶はまだか。お茶、お茶」と平気で言った。

「あうん」の会話

「今日は、文部科学省で、教科書の会議がある」「じゃあ、朝食べて、昼食べないで、夜食べない」「そうですよ」。

「今日は、藤沢で蜘蛛の観察会の指導がある」「じゃあ、朝食べて、昼食べないで、夜食べる」「あたりよ」。

「今日は、出版社の人と、絵本の構成について話し合いがある。小田原駅の喫茶店だから、一時間ぐらいで帰宅します」「じゃあ、朝食べて、昼食べて、夜食べる」「よろしくよ」。

「おやつ」の会話

夫が百円ショップでインスタントコーヒーと動物ビスケットを買って来た。インスタントコーヒーには、紙コップが付いていた。

「おやつにしましょう。お湯が沸いたら、これに、そそいで下さい」と言って、紙コップを二つ並べた。「紙コップでコーヒーを飲むなんて、いやよ」「紙コップがいやなの?」「紙コップは、いやなイメージだわ」「なぜだい?」「なぜって、尿検査の時、紙コップを渡されるでしょう。健康診断の時、血液採取で三回も四回も針を刺されて、その後、尿検査と決まっているわ」「別に尿検査をした紙コップでコーヒーを飲もうというのではない」「わかっているわ。でも、紙コップでコーヒーを飲むなんて気がしれない」「じゃあ、あなただけマグカップにしてあげます」。そう言うと、夫は自分だけ紙コップに熱湯をそそぎ、コーヒーを飲んだ。

「熱いのを飲むと口から火をふくわ。食道癌になるよ」「あなたは飲まないのですか?」と平然と聞き、そして動物ビスケットを食べた。

「この動物は何かな。犬かな」「これは、ワニよ」「こっちは熊かな」「これはカメよ」と、的外れな動物の名前ばかり言った。

私も、動物ビスケットを食べて、マグカップでコーヒーを飲んだ。私はコーヒーが嫌いです。その事を誰も知らないなので、出版社の仕事の打ち合わせでも、老人介護施設のボランティアでもコーヒーを飲まされます。吐きそうになります。

「地図を見て」の会話

夫が地図を見ています。

「うちのお寺は三島院だね。公民館は三島神社の敷地内にある」「三が付くのなら、この地域にもう一つ三の名前のお寺か神社がありそうよ」「お、あった。三嶋神社だ。区

別するために、嶋の漢字にしてある。国府津の方へ行く道沿いにある神社だ。あそこが三嶋神社というのか」「どれどれ見せて。メガネはどこだっけ?」メガネを探したけれどありません。「あッ、いけない。メガネしていた」

「きどった犬を見て」の会話

「あの奥さんが連れている犬、キャピキャピしている。リボンなんか付けて、いやな感じだわ」

「犬が、キャピキャピしているのかい。あの犬はダックスフンドかな。ヨークシャテリアかな」

「全然違うわ、プードルよ。今、犬の種類を知らないのに、思いついた種類を言ったでしょう」

「うん。あれがプードルというのか。なるほど」「足とシッポ以外を刈り込むと、置き物のようになるのよ」「プードルの事を良く知っているね」「犬が好きな人は、だれでも知っているわ」「プードルのプロだね。すると、プープロだ」

「プープロだなんておかしいね。その言葉、気に入ったわ。書いておこう」

「感謝」の会話

「ナスは買わないわ」「油いためにすると、美味しいよ」「ナスは栄養がないわ」「ナスに栄養を求めているのかい。そりゃあ無理だよ」「ナスは小さい頃、さんざん食べたわ」

十歳ぐらいの時、洋間と台所を残して、家を新築した。大工さんが朝早くから夜遅くまで、一年がかりで、その家は完成した。私が起きると小学校の教員であった父や母は学校に行ってしまった後だった。テーブルには、ご飯や、おかずがそのままになっていて、猫が乗って食べていたり、味噌汁のお椀が畳に転がっていたりした。私は

畑からナスをもいで来て油でいため、それを食べて学校に行った。それが毎日だったから、大工さんが、「この家は、なんだ」と呆れた。食事の栄養バランスなど考えた事もなく、食事が美味しいとか、楽しいと思った事がなかった。それで平気な家だった。忙しいばかりで、家庭を考える暇が、だれにもなかった。

「それは、ひどい。かわいそうな子供時代でしたね。栄養が取れなかったから小さいのですね」「こんな話だったら、いくらでもあるわ。この頃から、だれとも話をしなくなり、笑わなくなって行ったのよ」「今とは大違いですね。今は、しゃべりすぎ!笑いすぎ。今の生活が良いのは、だれのおかげかな。僕が良いからに決まっている。感謝をしてもらいたいね」「あなたには感謝しているわ」

「最悪」の会話

食事をしながら話す。

「寒くなると、トイレで死ぬ人が多くなるね。脳梗塞とか、心筋梗塞とか」「そうだね」「トイレが寒いからかしら」「それもある」「おしっこをすると、急に寒くなるのがいけないのかしら。ブルッとするね」「体から、あれだけのおしっこが外に出ると、急激に体温が低下し、体や脳が委縮するんだ」「寒くなるとトイレに行く回数が多くなるわ」「メスとオスとでは膀胱の大きさが違うんだ。メスのラットとオスのラットを解剖すると、オスの方が膀胱に沢山尿がたまっている」「よく知っているね。解剖だなんて、理科の先生のようなわ。それにしても、ウンコって汚いね。今、自分の体の中にあっただものだよ。あの汚さは信じられないよ」「本当に不思議ですね」「地震で瓦礫の下に閉じ込められた人が、おしっこを飲んで助かった話はよく聞くね」「排泄物といっても、おしっこには、まだ栄養分が残っているんだ」

食事は普通に終わった。

「これといった、たいしたおかずがあったわけではないが、ああ、腹いっぱいになった」「お腹がいっぱいになったから、もうねむねむだわ。おねむのサユリになっちゃったよ。」

「哲学的」な会話

「私も、きれいになりたいわ。どうして、こうも違うのかしら」「そんな考えはやめた方がいいよ。体を悪くしたり、金を失くしたりするよ。(咳き込んで)「笑わせないで、体を壊すなんて、おかしすぎるわ。これは、私の夢よ。夢は必ずかなうって、金メダリストも宇宙飛行士も言っているわ」「それは、若い内の事だよ。若い時は、おおいに夢をみて下さい。年を取ったら、かなわぬ夢なんかみたらいけません。かなう夢をみて下さい」「かなう夢って?」「人生残りわずかなのだから、かなう夢をみるんだよ」「たとえば?」「人それぞれ違うよ」「なるほど」

「年を取って、かなわぬ夢をみている人をドン・キホーテというのさ」「ドン・キホーテ?」「ドン・キホーテが今も世界中で人気なのは、年を取ってもかなわぬ夢をみているからだよ」

「この話の成り行きが心配だわ。どうなるのかしら?」「きれいになる夢を持つことはいいが、実際にやったら体を壊す。そして死ぬよ。ドン・キホーテの悲劇を考えてごらん下さい」「なるほど。そんな事で死ぬのはいやだね。それなら私が汚くていいの?」

「年寄りも、美人もブスも同じだよ。美人もブスも一緒くた。同じで、ひとくくりだよ。これで安心したでしょう」「でも」「ブスだった人は、おばあさんと言われステージがワンランク上がる。美人だった人は、おばあさんと言われ格下げになった気がするよ」「理屈が勝っていて、坊主の説教のようだよ」「なかなか納得がいかないだろうが、日本昔話だって、山に芝刈りに行くおじいさんや、川に洗濯に行くおばあさんが、美

人だったか、イケメンだったかは、問題にならないだろう。おじいさんとおばあさんで、ひとくりにされて、めでたし、めでたしだよ」「この話は、面白すぎるわ」「一回話すと忘れてしまうよ。二度と同じ事は話せない」「思いつきで、しゃべっているからでしょう」「あたり」

「うやむや」の会話

テレビニュースを観ていると、北海道の旭山動物園のペンギンが園内を散歩していた。

「ペンギンを飼いたいわ。手をつないで坂の下の魚屋に毎日魚を買いに行き行って食べさせたい。ペンギンは一回しか見た事がないわ」「そんなことはないだろう。一緒に見た事があるよ。どこだったかな」「ペンギンは、娘に池袋のサンシャイン水族館に連れて行ってもらって見たのよ。それが最初で最後よ。冬の寒い日で、風に吹かれて全員がじーっと立っていたのよ。本当に寒くて、毛が北風になびいても、我慢して立ち続けていたのよ。感動だったわ。子供は汚い茶色をしていて、ヒヨコの大きいお化けのようで、ペンギンには見えなかったわ。あなたと一緒にペンギンを見た事なんてないわ。他の女の人じゃあないの？どこの水族館なの？」「一緒に見たんだよ。沖縄だったかなあ？どこだったかな」「私は沖縄に行った事がないわ。それって、どこのだれなの？」

「はて？思い出せない」

平成二十三年(2011年)、ダークダックスが解散した。ダークダックスは沢山のロシア民謡を歌い日本に紹介した。

「箱根にバラライカという店があるわ。私は、そこで食事をした事があるわ。だれかの車に乗せてもらって行ったのよ。でも、だれと行ったのか、お店の場所も覚えてい

ないわ。バラライカという店の名前だけ、はっきり覚えているわ」「以前、その話を聞いたことがあったから、箱根で蜘蛛学会の大会があった後、一緒に食事に行ったじゃあないか」「え?あなたとバラライカで食事をしたの。全然覚えていないわ。別の女の人じゃあないの」「僕と食事をしたのを忘れたのかい。困ったねえ。あなたを車に乗せて箱根で遊んでくれるようなボーイフレンドがいたなんて、ありえないしね」「それって当たっているから失礼な言い方じゃあないよ。」

せっかくの思い出が、ごった返し、うやむやになって消えて行った。

「迷惑」な会話

「人に迷惑をかけないという言葉が大手をふってまかり通っているわね。そんな事って、ありえないわ。みんな何かしら迷惑をかけているよ」「あなたが、一番迷惑をかけて生きているね」「私も迷惑をかけているけれど、あなただって、いっぱい迷惑をかけているわ。人が生きて行くということは、いっぱい迷惑よ」「僕は平気さ。あなたが僕にとって迷惑とは思っていない。世話のやける人だと思っているだけだよ。他の人だって、今自分が迷惑をかけているなんて思ってもいないんだよ。いちいち、迷惑をかけないようになんて考えていたら生きて行けないよ。」

「しぶとくって、いやだわ。それなら人に迷惑をかけないなんて、言わないでほしいわよ。」

「二〇〇五年」の会話

「あなたは、よくこんな真っ暗な家に私と一緒にくらしているわね」「鈍感だからさ。そう大変と思っていないよ」「歌手の郷ひろみも、森進一もつい最近離婚をしたばかりよ」「離婚には理由が必要でしょうよ。」

「女というのはどうですか」「女は面倒だよ。お金もいるし」「あなたが駅前の一杯飲

み屋で酒を飲んで帰って来るような人でなくてよかったと思っているわ」キャバレーの女性と話すのは疲れる。カラオケも嫌いだし、タバコも酒もそんな所に行ってまで飲みたくもない。勉強がしたいだけだ。勉強ができる環境があればそれでいいのさ」

「クライ人だね」「料理をしない女との離婚というのは前に裁判でだめだったね。協議離婚は理由がなくてもできるんじゃないかな。とにかく、離婚は面倒だよ。人生は七転び八起きさ。僕の場合七つ目も八つ目も転びっぱなしで寝ているんだ。寝ているのが一番楽さ。苦しい事なんて、寝ている上をどんどん通り過ぎて行く。ここで僕が放り投げたら、あなたがかわいそうだよ。あなたは、この介護の現状を投げ出せないのに。自分の親もどうなるかわからない。その時々で考えてやって行こう。先の事はどうなるかわからないから考えないようにしよう」

夫はそう言うと、モーツアルトの『魔笛』を聞き始めた。「さて、『夜の女王のアリア』を、あなたにも聞かせてあげましょう。だれの歌がいいかな」夫はモーツアルトが大好きで、暇さえあれば聞いています。

「二〇〇六年」の会話

久しぶりに夫とレストランで食事をしました。春の御膳とクリームソーダを注文しました。私は子供の頃からクリームソーダが大好き。

「老人と一緒にいると心が狭くなるね」「住んでいる世界が狭いからだよ。北杜夫のお母さんのように、世界中を飛び回ってれば別だろうけどね。『楡家の人々』にお母さんの事が出ている」「昔、中学生の頃、みんなが競って北杜夫のどくとりマンボウを読んだね。ベストセラーになった。どくとりマンボウのシリーズは『航海記』とか、いろいろあるね」「『昆虫記』が一番おもしろいよ」夫に本の話しをさせると底なしです。

「時々こうして息抜きを、させてあげます。そうでないと介護でまいつてしまうよ」

「ありがとう。私は、あなたがいなければ生きていけないわ」「僕がいなくても二人の娘がいるから相談に乗ってくれるよ。僕はあまり長くないね」。夫は大学生の時に肝炎で入院している。

「続かない」会話

テレビで、「夫婦の会話が三分も続かないケースが多いようだ。次第に増えている傾向にある」と放送していた。わが家に限って、そのような事は無いと思っていた。しかし、会話によっては続かない場合もある。

新発売の化粧品を購入した。夫が、「それを塗って、美しくなったらどうするの?」と聞いた。「どうするかって?」。それで、会話が終わった。美しくなったら、どうするのだろう。この会話は三分も続かなかった。

紋次郎の会話

「木枯し紋次郎」を観ての会話()

笹沢佐保 原作

上州新田郡三日月村の貧しい農家に生まれたという。

十歳の時に故郷を捨て、その後、一家は離散したと伝えられる。

天涯孤独な紋次郎が、なぜ無宿渡世の世界に入ったかは定かでない。

木枯し紋次郎は、食事は道中の茶屋や旅籠などです。丼の麦飯にトロ口汁をかけ、あぶった目刺やタクアン(二切れ)を入れ、激しくかき回して、ガツガツかっ込む。食事時間は数分ほど。これを「^{とせいにん}渡世人食い」というらしい。食べ終わるとお金を払い、また長い^{ようじ}楊枝(設定は十五センチ)をくわえる。「こいつは、ただのくせつもん」が

決まり文句だ。紋次郎は、楊枝で木枯らしの音を奏でる。風流な奴だ。

私が「紋次郎サンは、ずいぶん早く食べるね。自衛隊の人の食事のようだね。体を悪くするよ。心配だね」と言うと、夫が「箸の持ち方がいけません。まねをしてみようか」と言った。そして二人で大笑いした。

「過ぎた事は、何も無かった事と同じでござんすよ。ずいぶんと、おたっしゃでよ。紋次郎のセリフを、夫がまねをして言おうとしたが、「過ぎた事は」まで言って、あとのセリフを忘れた。「おまえさん、でーじなセリフを忘れちまうようじゃあ、俳優さんになれねえで、ござんす」と言うと、また大笑いになった(第二十話「暁の追分に立つ」)。

「紋次郎は酒を飲まないね」「酔うと切られてしまうからだよ」と、夫がまじめに言った。私たちかたぎの夫婦は、酒も煙草もしない木枯し紋次郎のファンです。

「神奈川県の禁煙条例「すわんぞう」のポスターになるといいね」「そうだねよ」

「この時代にも、タバコってあったよね」「うん、あったよ」

「あねさんが、『これかい、これは、おっかさんの形見のキセルだよ』と言っていたものね。あのキセルも長かったね」「あれは、実際には島流しになった、おとつあんのキセルだよ」

「テレビでは、小さいと目立たないから、楊枝もキセルも長くしたんだね」「そうだね」(第二十話「暁の追分に立つ」)。

「紋次郎は、クールなヤツだよ。女が『もっとゆっくり歩いておくれよ』と言っても、『この重い荷物を持っておくれよ』と頼んでも、悪いやつらにてごめに手込にされていても助けない。『あっしには、関わりのねえこって』なんて気取ったセリフを毎回使って、ひど

いじゃないか」「人を信用していないからだよ。特に女には、いつもだまされているからね。かかわらないのが一番なのさ。女はやっかいだからね。」

「そうだね。『あっしは、ひとさまの言葉は信じねえほうなんで』と言っているものね。」

「あなたも、紋次郎のようだよ。『手伝っておくれよ』と言っても、ぜんぜん手伝わないね」「あっしは頼まれ事がきれえなんで。それは、あなたの仕事だからです。あなたがする仕事を奪ってはいけません。痴呆の予防だよ。老後は僕が先に死んで、一人で暮らさなければいけないから、その訓練だよ」「そうでしたか。」

「あっしは面倒な事に関わりを持ちたくねえんで、ござんす。」

「紋次郎のバカ。ちったア家の事を手伝ってくれたって、いいじゃあねえか。」

「女を背負うシーンが多いね。私も紋次郎サンに負ぶってもらいたいわ」「あなたは、どこも痛い所が無いから負ぶわないよ。『あっしは、先を急いでおりやす。頼まれごとなら、ごめんなすって』と言い捨てて、置いて行かれる」「私は小さいから、きっと負ぶってくれると思うわ。だめなら、あなたでもいいわ。」

「あっしは、連れをつくらねえことにしておりやす。そこを通しておくんなせえ。」

「あと、五キロぐらい減量したら、きっと負ぶってくれるわ。真剣に減量するよ」「紋次郎が、『しかたありゃアせん。一度きりですぜ』と言って負ぶったものの、『小せえと思ったが、やけに重い。ずっしりくるぜ』と言うよ。夏目漱石の小説『夢十夜』にも負ぶった子供がずっしり重くなる話がある。それと同じだよ。おかしいねえ。ワッハッハ」(第二十五話「海鳴りに運命を聞いた」)。

「子供にセリフがないのが多いね。最後に『おとつあん!』とか、『おじちゃん、あばよ!』と言わせたりするのが、強烈な印象だね」「その子役は、だまっていればいい

ものね。」

六、七歳の子役が名演技をする。その子は、三日月村の紋次郎の幼なじみの男に強姦された女が産んだ男の子、その後、母親が死んでしまったため、強姦した男のもとで育てられていたが、痛めつけられる生活だったので、言葉を失い話せないという設定。しかし、紋次郎になついてしまう。別れる時、紋次郎の背中に向かって「おじちゃん、あばよー」と叫ぶ。

「印象に残る、いいシーンだったわねえ。男の子の音が、よく通る声で、すばらしかったわ。何回も練習をさせられたのかしら。」すると、夫が「映像に出ている男の子のセリフと思っているのかい。あれは、他の男の子の吹き替えなんだよ。それに、アメリカの映画『シェーン』の焼き直しだよ。「シェーン、カムバック!」と言う名セリフがすでにあるでしょう?知らないの」「そ、そうですよね。」そういえば、その男の子より年上の子供の声だった。

ゲストの「お民」役の渚まゆみは、好きな女優さんです(第二十三話「夜泣石は霧に濡れた」)。

「パソコンに『ござんす』と打ち込むと、赤い線が出るよ。パソコンは、『ござんす』という言葉を知らないんだ。『ござんす』と打つたびに腹を抱えて笑っちゃう」「パソコンの辞書には無いのですね」と、夫がクールに言った。

「第二十八話『飛んで火にいる相州路』では、藤沢宿の旅籠はたごに泊まって、伊勢原から登った大山でドラマが展開する。「ヤビツ峠を越えて」「みのげ蓑毛の見晴らし茶屋」「小田原藩のお侍」というセリフがあるね。小田原宿の方にも足を延ばしてくれるとよかったのね。悪いヤツラが沢山いて、ドラマになるよ。

昔、ウチの庭にテントが張られて、映画のロケがあったよ。御殿場線の「汽車」を入れた撮影だった。俳優さんに、白いハンカチを出して、サインをもらっている人もいたよ。有名な俳優さんだったのかな。撮影は一日がかりだった。悪い事に、予告なく厚木の米軍基地と、御殿場の自衛隊基地の間をヘリコプターが往来するから、時々爆音で撮影が中断し、監督が怒鳴りまくっていたのを覚えているよ。ウチの上空は今でも自衛隊機の通り道になっている。おばあちゃんが、俳優さんや大勢のスタッフや、野次馬にお茶を出したりしたよ。ウチは、よく人が集まる家で、農家の人たちが夜「囲碁」をしに来たり、青年団の人たちが「コーラス」で集まったり、その昔は病院だったから接客用の湯呑やコップ、茶碗、皿、長い机、椅子、座布団が、いくらでもあった。葬式や組の寄り合いがあると、近所の人に貸したりしていた。小さい頃の事だよ。」

「それは、紋次郎と時代が全然違うよ。その映画は、きっと大正か昭和の初めのドラマですね。」

「紋次郎サンは、理屈っぽいお人だよ。『おめえさんのことは、思い出しもしねえが、忘れもしやせん』なんて、まるで哲学者だよ」「なかなかの名セリフですね」(第十二話「木枯しの音に消えた」)。

「鰐淵晴子の演技が良かったわ。私も、ゲストとして紋次郎の意気な女房役で出演したい。大原麗子、大谷直子だってやったことがない役だよ。関東じゃあ、ちったア名の知れた壺ふりのサユリだよ」「そりゃあ無理ってもんでござんす。なにしろ紋次郎は所帯を持ったことがない。」

「でも何か参加したいよ。紋次郎サンが歩く時の太鼓を鳴らす人はどうかな？ ドンドン ドンドン」「あなたは音大出だから、効果音ならできそうですね」(第二十六話「獣

道に涙を棄てた」)。

「脚本家は、紋次郎サンに原作にないセリフを言わせるのは、やめてもらいたい。振り分け荷物の上に赤いサザンカが一枝置いてあって、『サザンカが匂っておりやした』なんて、サザンカは臭わないわ。生物学的におかしいでしょう?」「もうすぐサザンカの季節だから、自分で嗅いで確かめてみたらいいです」「花そのものから、鼻で嗅ぐ匂いでなくても、その情景から漂うものを匂っているということで、ここでは、『サザンカの、あざやかな赤が美しく映えていやした』と言っているんだわ」「紋次郎は、そこまで考えちゃあいいえ」「サザンカの花びらはハートの形をしていて、夕日を浴びて一枚ずつハラリ、ハラリと散るのよ」「よく知っているね」「サザンカは好きな花だわ」(第二十九話「駈入寺に道は果てた」)。

「加代という娘に返り血をふいてもらった手ぬぐいの臭いを嗅いで『甘い匂いだ』なんて言うよ。紋次郎サンは、そんな事は言わない。脚本家は原作にないセリフを言わせてもいいの?」「いいんだよ。オペラだって、いろいろな演出があるでしょう」「そうね、蝶々夫人のオペラがいい例だわ。日本の事を知らない外国人が演出すると中国風になるものね」(第八話「一里塚に風を断つ」)。

「山形屋さんは最近かんろくが、ついてきなすったようで」「その貫禄というのはいやだね。やめてくれ」「故郷に、おかみさんや、お子さんは?」「そんなものおりやせん」「ご両親や、ご兄弟が、おありでしょう?」「今は、だれも、おりやせん。てめえでてめえの寿命を判じられねえ渡世でござんす」「女房、子供は未練のもとだっていいなさるのかえ」「死ぬ時が来たら死ぬまでだ。長く生きてえとは思ったこともねえ。せえぜ

え、あと十年かな。」

「ところで、一緒に暮らしている女は、だれです」「あれは、道で行き倒れていやしたのを拾ったんだ。時々、おもしろえ事を言って、笑かしてくれるから、おいてやっている。先日も、書き損じの紙を丸めてゴミ箱へ放り込もうとしたら、しくじって足元に落ちた。そうしたら『餌かと思った』って言ったんでさあ。こんなにおもしろえ事を、すぐさま言える女は、めったにいいねえ。朝飯の支度もするし、出かける時にはコーディネートも、ボタン付けもするので重宝しておりやす。一緒に住んじまえば、きりょうなんかは、どうでもいいようなものです。だが悪い事に、しょっちゅう、『大好きよ。あなたは、いかが？』って聞いて来るのがいいねえ。『まあまあだな』とか、『そこそこかな』とか、『そんな事、考えた事もねえ』とか言うと、『はなっから「わかっておりやす」と言って』なんて、うるさくて、かなわねえ。オウムのように言わされやす」「意見が一つも合わねえのに、仲がいいんだねえ」「へえ、そのようで。みんなに仲がわりインじゃねえかと、しんぺえをかけておりやす。あっしがボルネオやオーストラリアなどの旅に出ている間、放っておいても、でえじょうぶな女でござんす」「そりゃあ、安上がりで、いいねえ」「あっしには明日という日はござんせん。今日がいつもおしめえの日だと思っておりやす」「いい覚悟しているね。まるで木枯し紋次郎のようだ。本気で惚れちまうぜ。」

追っ手が迫ったと勘違いした紋次郎が、逃げてやり過ごす。しかし、追っ手ではなかったの、白い歯を見せて苦笑いするシーンがある。紋次郎のファンという渡世人・金蔵がそれを見て「おめえさんでも、笑うってことがあるんだねえ」と言う。私は、「あれ？紋次郎って、いつも笑っているよ」と思った。

それで、夫に「紋次郎って、笑えばなしじゃあない？」と言うと、「それは、あなたでしょう。あなたが、にやけているから、そう見えるのです」「そうかなあ」(第七話「六地蔵の影を斬る」)。

「あっしには 昨日という日も、明日という日も、ありゃあしやせん」

「明日のねえ、あっしに思い出す昔なんぞ、ござんせん」

「今日まで生きて来たからって、明日、命があるとは限りやせん」

「明日も生きてえと思うようになりゃあ、今日をぶざまに生きる事を考えるように、なりやす」

「なるようにしかならねえと、割り切らなけりゃあ、渡世人は生きちゃあいけません」……

「紋次郎サン、クーツ、かっこいい!!どうしよう」「かつてにやっておくんなせい。あっしは一人旅と決めておりやす。ごめんなすって」

私は「木枯しの」と口にするだけで、ニヤニヤしてしまう。一日中にやけてしまう。

「主題歌が、とてもいいわ。原作を読み込んで書いたんだね」「作詞の和田夏十は、市川崑監督の奥さんだよ」「斬新で映像にピッタリだわ。偉い人の奥さんは、やっぱり偉い人だね。私も偉い人の奥さんになりたいよ」

「木枯し紋次郎」 だれかが風の中で

作詞 和田夏十 作曲 小室等

一、どこかで だれかが きっと 待っていてくれる

雲は焼け 道は乾き 陽はいつまでも 沈まない

心は むかし死んだ ほほえみには 会ったこともない

昨日なんか 知らない 今日は 旅を一人

けれども どこかで おまえは 待っていてくれる

きっと おまえは 風の中で 待っている

二、どこかで だれかが きっと 待っていてくれる

血は流れ 皮は裂ける 痛みは 生きているしるしだ

いくつ 峠をこえた どこにも ふるさとはない

泣くやつは だれだ このうえ 何がほしい

けれども どこかで おまえは 待っていてくれる

きっと おまえは 風の中で 待っている

「新 木枯し紋次郎」を観ての会話()

「今度は、『あっしには言いわけなんぞ、ごさんせん』なんて言って、すましている。

何か言わなければ、なにもわからないよ」「それが男ってもんでござんすよ。

「^{ばくち}博打で稼いで子供に^{かぶと}兜を買ってやるのがあったね。紋次郎サンは子供が好きだね。

その子が『おじちゃん、おじちゃん』と叫んで、泣きながら別れを惜しむシーン

は感動的だね。ますますいいわ」「子供を使って映画をごまかすのはよくない。それに、

子役が栄養が良すぎる。食うや食わずの百姓の子なのだから、もっと痩せていないと

いけないよ。

「おまえさんは、つまらない事を言う人だねえ。そんな事を言って、なんの得がある

のかえ」(第十七話「女が二度泣く水車小屋」)。

「あなたは映画評論家にはなれないわ。『紋次郎の振り分け荷物の中に、大きなハマグリが一個入っていたでしょう。あれは、浜辺を歩いた時に拾ったのかしら。ドラマの中で説明がないね』と私が聞いた時、『脚本家が、後で使おうと思ったけれど使わない内に忘れたのさ』と言ったでしょう。でも、第三話「四つの峠に日が沈む」で、古傷が傷む用心棒がハマグリを紋次郎に投げつけるシーンが出て来るわ。ハマグリには万能膏(軟膏)が入っていて、それを紙に塗って、紋次郎にひざまずかせて、古傷に貼らせようとするのよ。その時のハマグリを紋次郎サンは、大事に持っていたんだわ。」

「そうでしたか。よく観ているね。『木枯し紋次郎評論家』になれるね」「紋次郎サンは、毒消しの薬とか、熱さましとか、いろいろな薬を持っている。すごいわ」「生きて行く知恵ですね。」

ゲストの「お民」役の池波志乃は、好きな女優さんです(第三話「四つの峠に日が沈む」)。

相州小田原の大久保家 家中・堀田又兵が持っていた刀は、主君に献上する刀で、磨ぎ師から持ち帰る所だった。ヤクザとの戦いでヤリで衝かれた堀田が死ぬ前に「持って行け」と言うので、紋次郎は折れた^{ながどす}長脇差の刃と替える。

「この回以降、紋次郎のドスの刃は、小田原十一万三千石の殿様のだね。すごいね。悪い奴等を、いっぱい切れるよ」「話だけでも、よく切れそうですね。」

「大久保といえば家臣に二宮金次郎がいたから、会おう事もあったかしら?」「同じ百姓の出でも、考え方や生き方が全然違う。出会った所でドラマにならないでしょう」

「そうだね。金次郎は何かとうるさそうだから、一番かかわりたくないね。紋次郎が『用があるなしだけのご縁でござんす。つきましては、渡世の挨拶は省かせていただ

きます』とか、『知らず知らずの内に、巻き込まれちまうもんだな、浮世ってもんは、しち面倒なこった』と言っているのに対して、金次郎は『人間にとって大切なのは絆である』と説教するね。『悪い奴でも切ってはいけない』とか、『博打ばくちに手を出したらいけない』とか、『少しの薪でも火が釜に回るように、釜の尻はススのないようによく磨け』なんて、ゴタゴタうるさい事を言うよ。刀の代わりに、経済学で切り込んで来るね」「あっしは、めんどくせえことはわかりやせん」。

「天保十一年、大久保家の記録に、『堀田又兵は、主君へ献上する名刀・志津しず三郎兼氏さぶろうかねうじ作を奪って逐電す。又兵の縁者に切腹、閉門の御沙汰あり』というのがすごいね。むちゃくちゃだね」「時代なので、いたしかた ござんせん」「みんなが貧しかった天保の飢饉の話だね」「私たちが、その時代に居たらどうだったかしら」。

「きっと、飢え死にしているだろうさ」(第四話「雷神が二度吼えた」)。

「紋次郎サンは、『あっしには、帰る故郷なんか、ござんせん。生まれただけの所ですからねえ』と言っているのに、名のる時には『上州無宿の紋次郎と申しやす』とか、『右拙うせつことは上州にござんす。上州は新田郡三日月村(現・群馬県新田郡)の紋次郎と発します。通行のみぎり御当家親分さんに御挨拶したく存じます』と言うね」「仁義には決まりがあるのでしょ」「私も、国定忠治、清水次郎長、神戸かんべのながきち長吉に出会ったら仁義をきりたい。『てめえ、生国は相州足柄上郡金田村生まれのケチな野郎でござんす』。足柄上郡がいやだわ。それにケチじゃあないもの」「足柄上郡を取ったらいい。ケチというのは、自分をへりくだって言う言葉だよ」「知っているわ」「野郎じゃあないね」「三ツ星のお花と申します。以後、お見知りおき下さいまし」「おめえがお花だなんて、笑わせるぜ。しおれた花だぜ」「子分こぶんは、川地民夫、尾藤イサオ、大和田獏がいいわ」

「忙しくて、来ちゃあくれめえ」「だったら柳沢慎吾でもいいわ。松田町の川音川の橋の上で何度も出会った事があるわ」「そりゃあ、柳沢慎吾が高校生の時の話だろう」(第十一話「白刃を縛る五日の掟」)。

「新 木枯し紋次郎」 焼けた道

作詞 中村敦夫 作曲 猪俣公章

一、だれも知らない 愛がどこにあるのか

空の過去にも 焼けた道にも

人を愛した奴はいない

野に香る百合の花

教えておくれ 愛がどこにあるのか

二、だれも知らない 人はなんで生きるか

食べるためにか 殺すためにか

それを知ってる奴はいない

吹きすさぶ 木枯しよ

教えておくれ 人はなんで生きるか

紋次郎と自殺を語る

テレビを観ていると、しばしば「人身事故で電車が運休」と報道される。今年は特に多いように思う。人身事故のほとんどは自殺のようです。

最近では、アメリカのプロ野球に移籍して活躍したピッチャーの伊良部秀輝投手がアメリカの自宅で自殺した。いじめで小学生が、その若い命を絶つこともある。職を

失った人、病や老後を悲観した人も男女を問わず自殺する。

私は自殺をしようとした事は一度もないが、小学生の頃、家出をしようとしたことがあった。一晚寝ているうちに、親の顔と自分の顔がそっくりだと気がつき、家出をやめた。ささいな事で家出は中止となった。

テレビドラマ『木枯し紋次郎』には、まるで哲学者の問答のような場面がある。紋次郎のファンという渡世人・金蔵が紋次郎に質問するシーンだ。

「おめえさんの生きがいったのは、なんだね」

「そんなものは、ありゃあしねえ」

「だったら、なんのために生きてんだい」

「今はまだ死んじゃあいなえから、生きてる。多分そんなところだろうさ」

「生きていたいとは思ってねえんだな」

「すすんで死にたくもねえ。死ぬ時が来たら黙って死ぬ。ただそれだけのことさ」

(第七話「六地藏の影を斬る」)。

注目したいのは、天涯孤独、無宿渡世、収入は博打^{ばくち}だけの紋次郎が、「すすんで死にたくもねえ」と言っているところです。親が、友だちが、先生が、兄弟姉妹が、社会が、そして自分で「先」を閉ざしてはいけない。

「明日という日の事は、考えた事もござんせん」と言う紋次郎だが、自殺者と紋次郎の違いは、次のセリフにある。「明日のねえ身には、恐ろしいってものはござんせん」。

そこには、たくましい紋次郎がいる。これが紋次郎の生き方です。

「捨てても惜しい命とは思いませんが、人違いで切られるのは、まっぴらごめんでござんす」。

外からは楽しく見える、どこの家庭でも、何かしら暗い、つらい事があるものです。
渡世人の紋次郎にもある。

「あてのねえ旅でも、心にひっかかる所が一つや二つ、あるものでござんす。旅する身となれば、空と地面があるきり。雨が降るか、雪が積もるか、風が吹くか、火があるかの、ちげえぐれえで、どこにいても、たいした変わりがねえって気になってくるんですよ」

「疲れた手足を伸ばす。眠る。明るくなるのを待つ。今日が過ぎれば明日が来る。そこに道があれば歩くだけじゃあ、いけねえんですかえ」(第三十八話「上州新田郡三日月村」)。

いじめにあい独りで弁当を食う羽目になって自殺した小学生がいた。だれも助けられなかったのか。ひとこと心に響く言葉をかけてやれなかったのか。紋次郎が言う。

「ひとりぼっちは、だれもおたがいさまですぜ」

「命と、明日の天気の話は、だれにもわかりやあしません」

「無駄に命を捨てるのは、よしなせえ」

私も言いたい。「自殺はやめておくれ。死んだら、その命、もどっちゃ きません。悲しいばかりでござんす。命は最後の日まで大切にするものです」

自殺をする前に、宗教に救われる人も多い。しかし、宗教に入った人でも自殺をする。木枯し紋次郎と敵討ちの侍の会話がある。

「あの尼さんは仏に仕える身で、どうして雪が死ぬことが恐ろしいのであろうか」

「よええからでしょう」

「何かに頼り、すがろうとする者は、弱いと言うのか」

「頼れるものは、てめえだけでござんす。そのてめえに頼れなくなったら、^{めいど}冥土から迎えが来るんじゃあ、ねえですかえ」。

^{なだれ}雪崩が崖の小屋を襲った。尼さんは気が狂って谷底に身を投げてしまった。自殺は、どう考えても悲しい(第三十七話「冥土の花嫁を討て」)。

死ぬ覚悟の人が助けられる場合がある。自殺ではないが、イノシシに突然襲われた紋次郎が崖から転落する場面がある。

「どうせいつかは、どっかで野たれ死にする身でござんす。雪ん中、うずまっちまえ、みっともねえ死にざまあ、さらすことはねえ。そう思いながら気を失いやした」。助けた女が、「そんな悲しいことを」と言う。

助かった紋次郎が言う。「とんだ、ごぞうさ、かけやした。おかげさんで命拾いしやした」。

そして、「先を急ぐあてはござんせん。あっしの旅には終わりはねえものと思っておりやす」(第三十五話「雪に花散る奥州路」)。

ヒーロー『木枯し紋次郎』は自殺をしない。私も自殺は考えないが、小さい頃からいつも疲れていて、眠りたい、泡になって消えてしまいたいと思いつけて今日に至っている。夫が少女のようだと笑う。

辞世の句

死んだ夫にかけ言葉、自分が死ぬ時言う言葉を考えた。

「あばよだねえ。おまえさん」。これがいい。両方に使える。

次に、インターネットで辞世の句を検索した。織田信長の妹お市の方の辞世の句は、

「ほととぎす」が読まれていて、すばらしい。さらに細川ガラシャの辞世の句は、美しくて教養が高い。

お市の方の辞世の句

「さらぬだに 打ちぬる程も 夏の夜の 別れをさそふ ほととぎすかな」

細川ガラシャの辞世の句

「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ」

インターネットの辞世の句をずっと見て行くと、有名人が、さまざまな辞世の句を詠んでいた。人斬り以蔵も自身で作ったとは思えない辞世の句を残している。

高杉晋作の辞世の句

「面白き 事も無き世を 面白く」

沖田総司の辞世の句

「動かねば 闇にへだつや 花と水」

岡田以蔵の辞世の句

「君がため 尽くす心は 水の泡 消えにし後ぞ 澄み渡るべし」

それに比べて「あばよだねえ、おまえさん」は、あまりにも下品だ。そうです。死んで逝く時ぐらい、すごい辞世の句を残したい。まだ時間があるので、じっくり考えよう。